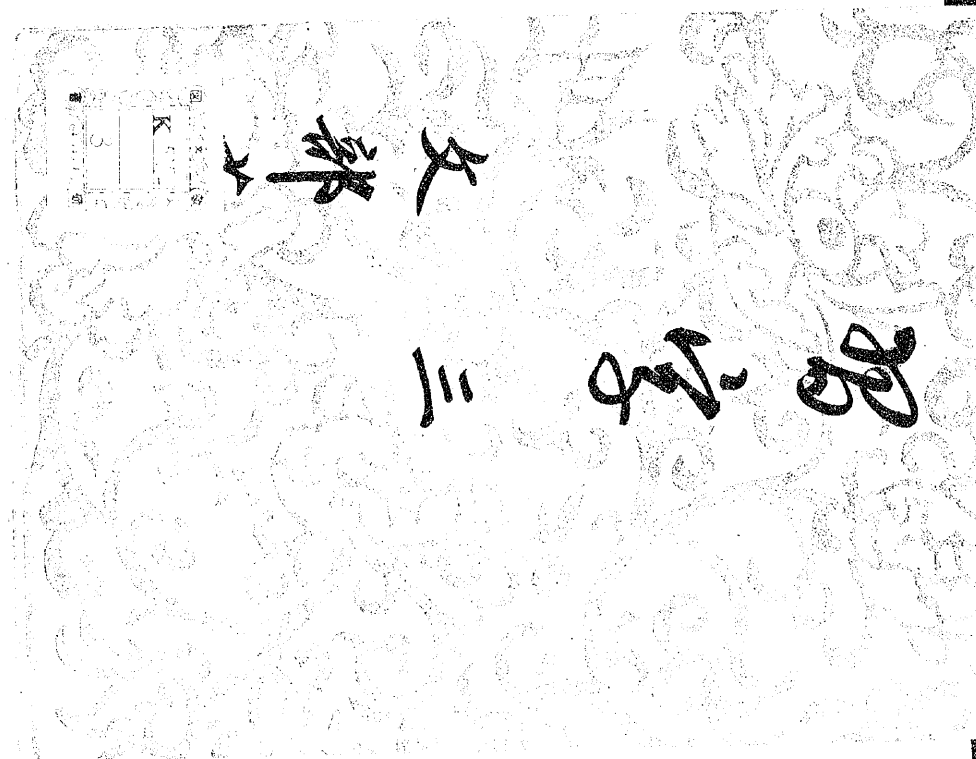




K250.72

1

3

張家三
文部省

大都會故料書局
24 3 16
111

は し が き

この手本は、漢字およびかなの名筆を鑑賞したり、実習したりするために、古來名作と称せられてゐる作品から、文字や語句を抜き出して適当に排列し、あるいは、作品の一部分をそのまゝの形で取り出したものである。作品の名の下に集字と書きそえてあるのは前者で、部分とあるのは後者の意味である。文字の大きさは、原形を見得るようになるべく原寸によることにしたが、中には編集のついでで多少違つてゐるものもある。

一、山田公雪菴碑（集字）

江戸時代 實名菴翁書

上下。左右。兄弟。父母。妻子。骨肉。出身。

實名菴翁は、三筑（龜天阜玄海梅逸三跡）不野遊、藤原佐理、藤原成以後の第一の能書家といわれ、遺作も多く、現代の書にも火きな影響を與えてゐる。

この書は、ゆるやかな調子で、すなおに筆を運んでゐるが、おだやかな筆づかいの中に、こまかな味わいが感じられる。

上 下 左 右
第 一 父 母 妻 子
骨 肉 出 身

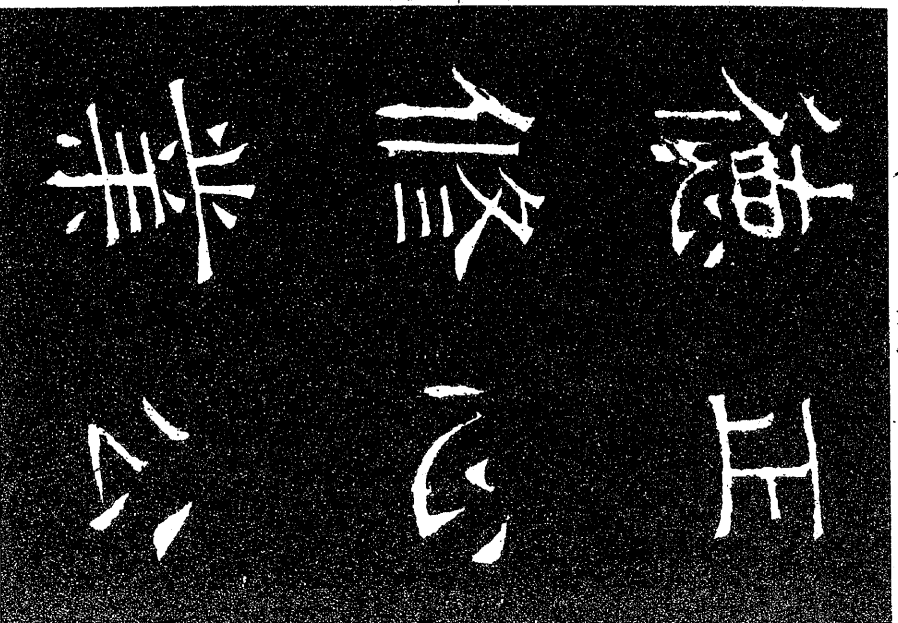
二、伊闕佛敕碑（集字）

初唐 褚遂良書

正心公德修業。

褚遂良は、虞世南、歐陽詢、顔真卿とともに、唐の四大家のひとりで、多くのすぐれた筆跡がのこされている。

この書は、筆の鋒が立って働いていて、筆づかいにも、こ
とさらめいた技巧を用いず、あつさりと書いてあるから、よ
く引きしまった清らかな美しさが感じられる。



三、九成宮醴泉銘（集字）

初唐 歐陽詢書

盛夏。炎天。避暑。雨雲。夕立。青山。臨風。泉水。潛波。新月。

この書は、唐の四大家のひとりである歐陽詢の代表作の一つである。字は、わりあいに縦長の形で、筆画の長短や上下左右のつりあいのとりかたに、巧みな工夫がこらされており、また筆づかいは、一定の調子に乗って速く運ばれているので、り、しい感じを興える。

水 青 暑 盛
清 山 雨 夏
波 臨 雲 炎
新 風 夕 大
月 泉 立 避

四、孔子廟堂碑（集字）

初唐 虞世南書

日月。天地。八方。四海。春秋。千年。造化。山河。列國。
文教。命名。書籍。

虞世南は、唐の四大家のひとりである。遺作は少ないが、この碑文は、その時代の楷書の中でも、最も品のよいものである。筆画はすべてかどばらず、のびくとしていて、静かな、なごやかな感じがする。



五、集字聖教序（改集）

晋 王羲之書

四時。朝夕。風雨。寒暑。東西。古今。內外。前後。大小。有無。輕重。增減。物心。形質。

王羲之は、中華民国歴代中、もっともすぐれた書家で、書聖といわれ、羲之以後のあらゆる書風のみなもととなつてゐる。したがつて、日本でも中華民国でも、今日にいたるも、これについて学ぶものが多い。

この碑文は、唐の代に羲之の遺作から集字して作つたものであるが、ここに載せた字句は、それから更に集字したものである。明かると、暗れく、とした感じのする、もつとも標準的な行書である。

四時朝夕風雨寒
暑東西南北
前後大小有無輕
重增減物心形質

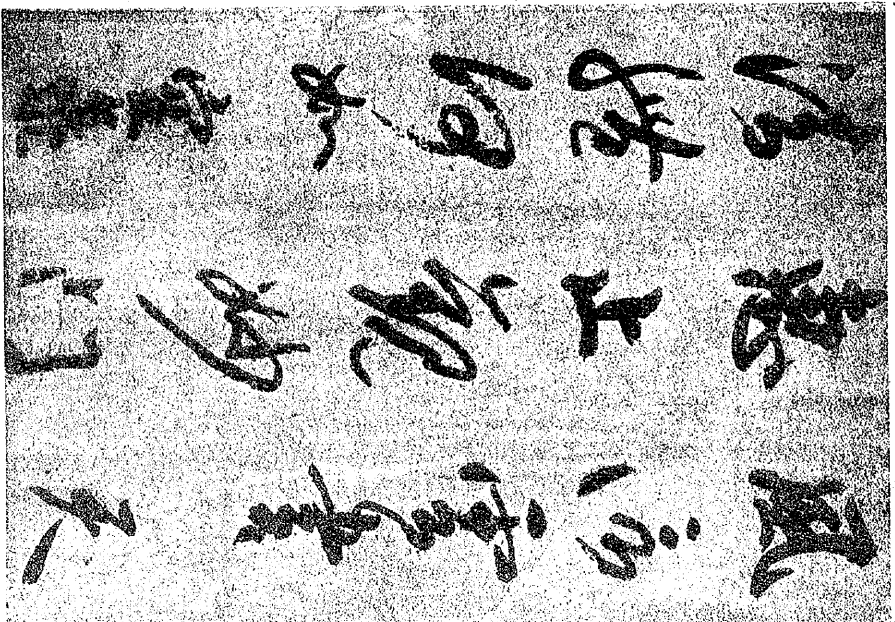
六、風信帖(集字)

平安朝

空海 筆

風信雲書。天惠。止觀妙門。法体何如。空海。

これは、三筆のひとりである空海が傳教大師にあてた手紙の中から、字句を抜き出したもので、天惠のほかは各句とも、もとのまゝの配字で、各字の連絡は保たれている。筆が軽走りせず、紙にくい入るように運んであるから、筆画が厚味をもち、おちついて力強く見える。

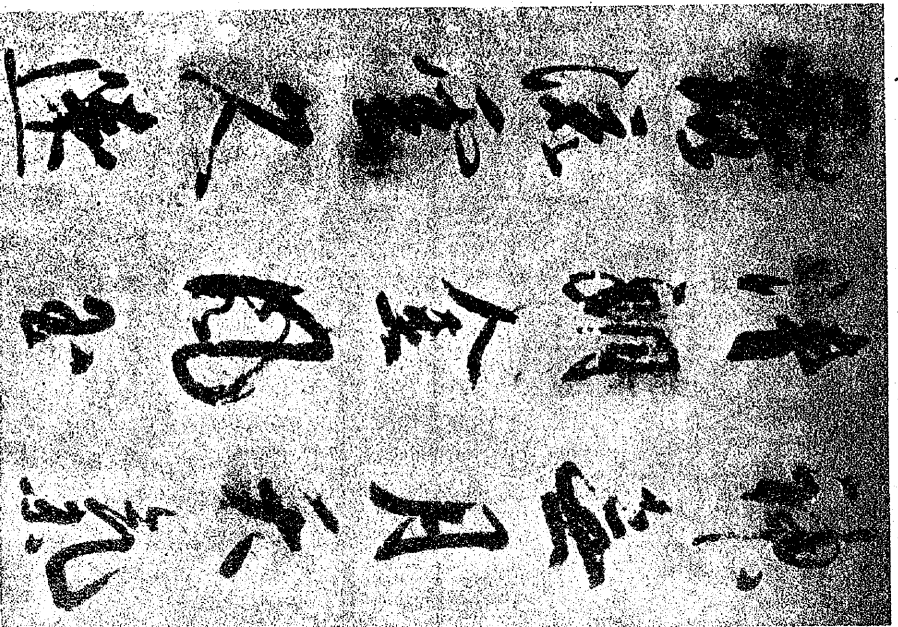


七、伊都内親王願文（集字）
平安朝 橋逸勢 筆

神無月。天氣清明。金風玉露。流雲。久遠。

橋逸勢は、三筆のひとりであるが、遺作は少ない。

この願文は、全体の感じがふらかで、筆画がすがすがしく、筆づかいに変化があつて、美しい効果をおさめている。



八、李嶠詩卷（集字）

平安朝 嵯峨 天皇 寂然
輕風。菱秀。春郊路。桃花。流水。芳草香。金殿玉樓。
江山麗。人家。綠竹。白雲飛。

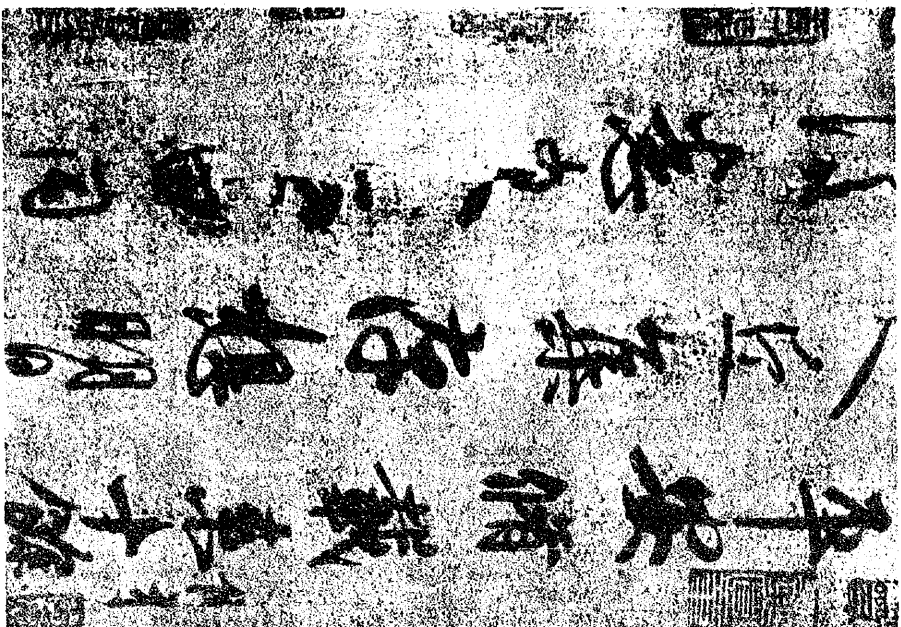
嵯峨天皇は、空海逸勢とともに三筆といわれている。
この字は、形にも筆つかいにも変化があつて、個性の強い
生き／＼とした印象を與える。行書と草書をまじえているが、
このような書きぶりは、むかしから多く行われてきた。



九、李穡帖（部分）

晉 王羲之書

……平安修載來十余……近集存想明日……復悉（來）無（由）同……
 数多い王羲之の遺作の中でも、すぐれたものの一つである。
 文字の大小や、筆画の太さ細さや、筆の入れかた、運筆の
 緩急などに、相当の変化があるにかゝらず、これから受け
 る感じは、それらの変化が目につかず、おゝような、さつぱ
 りした清いものである。



十、和漢朗詠集（部分）
平安朝 藤原行成筆と傳えられている

われみてもひさしくなりぬすみよし
のきしのひめまついくよへぬらむ
みよしのゝ山のしらゆきつもあるらし
ふるさとさびくなりささるなり 是則
ほのくとかかしのうらのあきりに
しまかくれゆくふねをしそおもふ 人丸

文字の形がよくととのい、筆づかいがやさしく、明かるい
感じを與えるので、この書風は今も基本的なかなの手本とし
て廣く行われている。

わかれみてもひさしくなりぬすみよし
のきしのひめまついくよへぬらむ

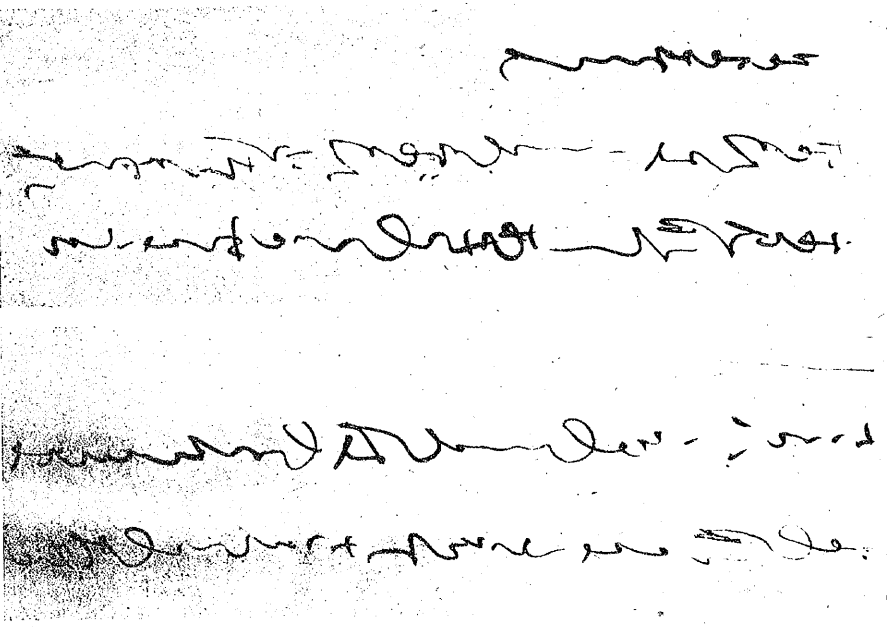
みよしのゝ山のしらゆきつもあるらし
ふるさとさびくなりささるなり 是則

ほのくとかかしのうらのあきりに
しまかくれゆくふねをしそおもふ 人丸

十一、関戸本古今集（部分） 平安朝 藤原行成筆と傳へられてゐる

よのなかにたえてさくらのさか
 さらはるのこゝろはのとけからま
 し
 をみなへしあきのゝかせにうち
 なひきこゝろをひとつをたれ
 によすらん

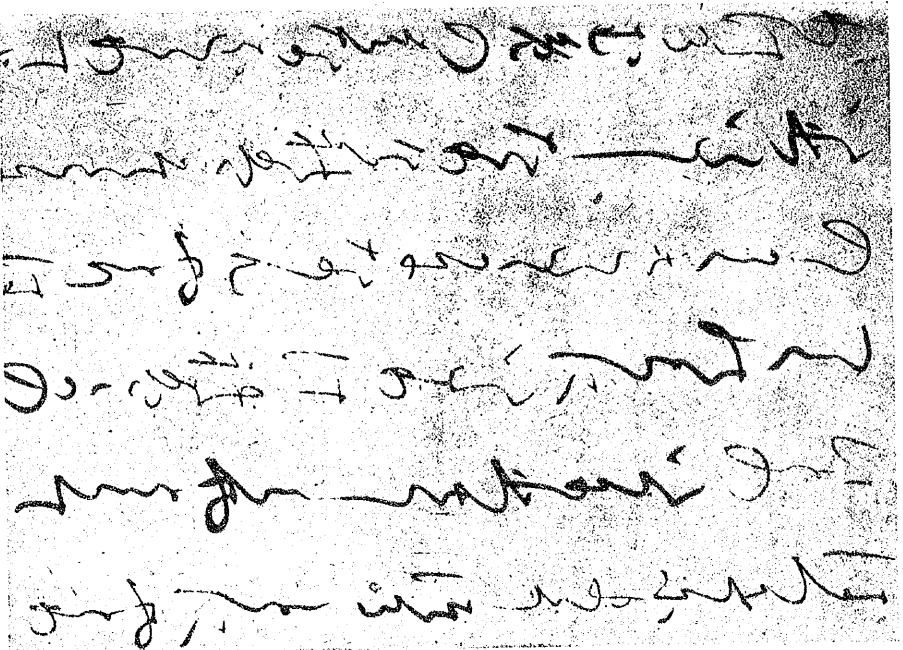
これは、藤原行成の筆跡と傳へられているものの中でも、
 すぐれたもので、筆づかいがとゞこおることなく、のびく
 と自由に書きつゞけられており、ゆつたりとした、おちつき
 のある作品である。



十二、高野切第一種（部分） 平安朝 紀貫之筆と傳えられている

はつせにまうつることにやとりける
 ひとのいへにひさしくやとらてほと
 へてのちにいたりければかのあるし
 のかくさたかになんやとりはあると
 いひいたしたりければそこだたて
 りけるむめのはなをくりていめる

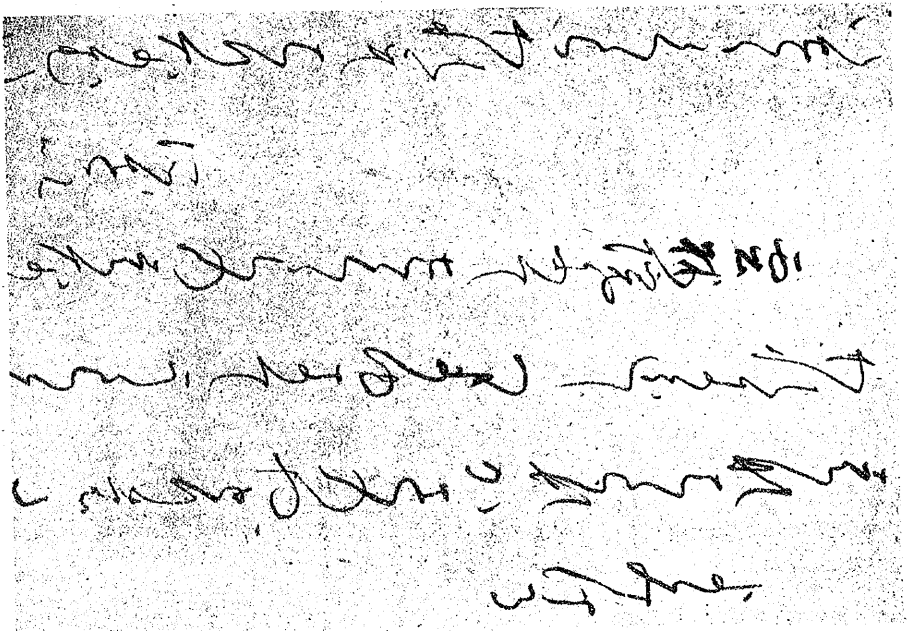
高野切は古今集の古写本の一つである。書風に三種の型が
 みとめられるので、これを第一種・第二種・第三種とよんで区
 別している。三種とも、ていねいにきちんと書かれ、おの
 の別の趣をもつて古筆中に光を放っている。第一種は、三種
 の中ではもつとも変化に富み、品位が高い。墨の色の変化が
 多いこともまたその特色である。



十三、高野切第二種（部分） 平安朝 紀實之筆と傳えられている

はなちらすかせのやとりはだれかしる
 ……とみける
 われにをしへとゆきてうらみむ
 望林院にてさくらの花をよめる
 ……そせい
 いさくくられもちえむ……

これは高野切第二種の第一部で、三種中のも古風な書体である。線がつよく形がひきしまっている。また、筆の運びが重々しく、おちついた美しさをもっている。



十四、高野切第三種（部分） 平安朝 紀貫之筆と傳えられている

あはれてふことのほことにかくのゆはむ

かしをこふるなみたなりけり

よのなかのうきもつらきまづけなくに

まつしるものはなみたなりけり

よのなかはゆめかうつくかう……

これは高野切第三種の一部分で、形がよくととのい、すこしもかたよつたところがなく、明かるく、すつきりとしていて、線が美しい。筆の運びは、第一種ほどには変化をこらさず、軽くなだらかにやさしく書いてある。

あはれてふことのほことにかくのゆはむ
かしをこふるなみたなりけり
よのなかのうきもつらきまづけなくに
まつしるものはなみたなりけり
よのなかはゆめかうつくかう……

平安朝 藤原行成筆之傳えられてゐる

いひをせむかれぬかな

たる所

5 當日火をみはへりて

九、九

中に、ペンでは見られぬいろ／＼の變化があることがわかる。

K250.8-3
 395.1-3-3
 K250.8-3
 K250.72-1-3

23

字 11
卷

發行所

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE NOV. 13, 1947)

省 文 部 省
 所有
 發行
 者
 東京 麹千代田区神田岩本町三番地
 中等學校教科書株式會社
 代表者 阿部 眞之助
 東京 麹千代田区市谷區一丁目十一番地
 印刷者 大日本印刷株式會社
 代表者 佐久間長吉郎
 東京 麹千代田区神田岩本町三番地
 中等學校教科書株式會社

昭和二十三年九月二十六日印	刷	同日印刷発行	
昭和二十三年九月三十日発行	行	同日印刷発行	(一)
昭和二十三年十月十三日修正印刷	刷	同日修正印刷発行	例
昭和二十三年十二月十七日修正発行	行	同日修正印刷発行	例
(昭和二十三年十二月十七日 文部省検査済)			

